

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：20105

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24660040

研究課題名(和文) 外傷サーベイランスが現場にもたらす課題とシミュレータを用いたスタッフ育成

研究課題名(英文) What is challenge of trauma surveillance? Staff training using the simulator

## 研究代表者

山田 典子 (YAMADA, NORIKO)

札幌市立大学・看護学部・准教授

研究者番号：10320863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：警察と医療機関との連携を必要とする虐待や暴力の事犯について、警察からみた医療機関の対応の現状と課題を明らかにした。調査結果を参考にして3年間で約80名の看護職を対象に児童虐待、ドメスティックバイオレンス等、家庭内の密室で起こる外傷の早期発見と治療的介入および記録の仕方等について教授した。「外傷の観察」と「傷を観る」ことは似ていて異なるものであり、受講者アンケートより、「これまで傷の手当はしてきたが、外傷を見て、記録し、予防に活かす視点はなかった」という意見が寄せられたので、多職種協働の研修を今後も開催し、外傷予防のシステムの基盤づくりを促していく。

研究成果の概要(英文)：Subject to child abuse nursing staff of about 80 people in three years. The aim of this study is to analyze the current state of the cooperation between police and medical agencies, the problems that arise when reports are made to the police by medical agencies regarding victims of violent crime from a closely related person, such as a spouse or partner, and recommend a better victim support system. The X Police department was chosen as the focal organization of this investigation, and an unsigned automatic recording questionnaire was distributed to 500 law enforcement officers who dealt with a domestic violence (DV) crime within the past three years. It was decided that cooperation reinforcement was necessary to provide victim support, and there were popular suggestions, such as "a periodic exchange of views and implementation at a study meeting" (53.2%), "education of health care workers" (43.6%).

研究分野：地域看護

キーワード：外傷 サーベイランス シミュレーション 他職種連携 セーフコミュニティ

## 1. 研究開始当初の背景

セーフコミュニティ(SC)認証の一要件でもある「外傷サーベイランスシステムの構築と継続的な評価」に着手している自治体は、国内に10数箇所(平成27年3月末)存在する。

ある市では、自殺に関してSCに關与する以前は全く対策を講じてこなかった。警察の統計にのぼる自死件数以外で自殺の実態を把握する手段を持ち合わせていなかった。しかし、地域の基幹病院を巻き込んだ外傷サーベイランスシステムを整えていったことで、死に至らない多数の自殺企図件数の把握と、自殺企図を図るものの特性がわかり、根拠に基づいた自殺予防の取り組みが展開されるに至った。市のSC推進会議で外傷調査委員会の報告が定期的に行われ、その結果を受けて、自糺予防対策委員会や子どもの安全対策委員会、高齢者の安全対策委員会などが樹立した。しかし、多くの自治体が人材不足から外傷サーベイランスに着手できずにいる。そこで、外傷サーベイランスを担える看護スタッフの育成と警察等との協働について必要と考え、本研究テーマに取り組んだ。

## 2. 研究の目的

警察と看護の連携を強化することを鑑み、法看護学に関する知識、受講前後の実践度、講義内容へのご意見を把握し、外傷サーベイランスにつながる今後の法看護学の教授方法について検討する。

## 3. 研究の方法

警察の医療機関に対するニーズを把握し、その内容を反映させて外傷サーベイランスの実施につながるシミュレーション研修を開催する。さらに、シミュレーション研修に参加した看護師へ、受講前、受講直後、受講後3ヵ月後の3時点で15分程度のアンケート調査を実施し内容の評価改善を図る。

## 4. 研究成果

### (1) 外傷サーベイランスの実施状況と課題

外傷サーベイランスの「サーベイランス」を直訳すると、「監視」や「見張り」を意味するが、SCでは、外傷の情報を入手し予防していくためのプログラムを指し、この名称を用いている。いつ・どこで・どうやって住民は事故に遭っているのか。外傷のデータを収集・分析し、それをもとに事故を予防する環境をつくることを可能にするツールとして外傷サーベイランスシステムが活用されている(横田)。

外傷を負った市民を対象に発生状況等の情報(発生分布や原因などに関するデータ)を組織的に継続して、収集・統合・分析し、その結果を、全ての関係者が共有し、事故やけがを防止するためのプログラムである。

目的: 各自治体の根拠に基づく取り組みの根幹となる外傷サーベイランスの実態につ

いて整理をし、現状の課題を抽出する。

方法: SC自治体のホームページより外傷サーベイランスに関する記事を抽出。加えて、日本セーフコミュニティ推進機構のレターより関連項目を抜粋し比較検討した。本研究は一般に公開されている既存の資料の分析であり倫理的な問題はない。しかし、分析内容の公開にあたり対象の自治体が特定されないような配慮を行った。

結果: 日本における外傷サーベイランスの特徴は、

急搬送を中心に、警察データ、厚生データ、アンケートなどを組み合わせて実施している。

病院でのデータ収集は難しいが、電子カルテを活用した外傷サーベイランスシステムを立ち上げている自治体もある。

また、日本の外傷サーベイランス委員会には大きく2つのパターンが見られた。

研究者(あるいは大多数)が外傷サーベイランス委員会メンバーである

研究者はいない(あるいは数人)が、保健・警察・消防等が主要メンバーであった。

これらのことより、

サーベイランス委員会の構成メンバーが地元の取り組みや課題を知らない研究者である場合、机上の理論が先行し、うまくデータと取組みをつなげられていないことが課題である。

## 文献

1) 横田昇平: 地域における外傷サーベイランス(特集 住民が求める安全・安心のまちづくり--セーフコミュニティで保健活動が変わる)。保健師ジャーナル 63(12), 1098-1103, 2007-12

### (2) シミュレーションによる学び(中間集計)

調査対象は、外傷サーベイランスにつながる看護アセスメントに関する講義とシミュレーション学修経験のある大学院生、及び専門看護師学習者とした。

平成25年度分のデータを分析対象とした。自記式質問紙による意識調査は2時点の照合が必要なため、対象自身が「自ら定めたID」を割り付け、2回とも記載してもらい受講前、受講後の2時点の変化を紐付できるようにした。内容の評価を含むアウトプット評価、講義直後の自由記載調査による定性的アウトカム評価の手法を用いた。

2校31名(女性27名、男性4名)の協力が得られた。年齢別では、30歳代が17名(54.8%)と最も多く、次いで40歳代8名(25.8%)であった。経験年数は、10~20年未満が16名(51.6%)、20年以上10名(32.3%)、10年未満4名(12.9%)であった。

表1 対象者の属性

質問項目	選択肢		
		n	%
性別	女性	27	87.1
	男性	4	12.9
年齢	Mean ± SD		
	20代	2	6.5
	30代	17	54.8
	40代	8	25.8
	50代	3	9.7
	回答なし	1	3.2
経験年数	3-5年未満	1	3.2
	5-10年未満	3	9.7
	10-20年未満	16	51.6
	20年以上	10	32.3
	回答なし	1	3.2
学歴	専門学校卒	20	64.5
	短大卒	4	12.9
	大学卒	7	22.6
職種	看護師	26	83.9
	助産師	1	3.2
	保健師	4	12.9
	教育	3*	再掲
部署	医療機関	26	83.9
	行政機関	2	6.5
	教育機関	3	9.7

研究対象者への「学んだことが役に立つと感じたか」という問いに対し、【フォレンジック看護の必要性】【フォレンジック看護を活かす】【受講生個々の課題】【組織の課題】【フォレンジック看護教育改善の展望】の5カテゴリが抽出された。

現在、平成26年度分のデータに、受講後3か月の調査結果を加え、分析中である。

### (3) 警察との連携に必要な医療機関および医療従事者の課題

目的：配偶者や恋人といった親密な関係にある者からの暴力的事犯について、警察の担当者への質問紙調査を行い、医療機関から警察への通報等の組織間連携の現状と課題を分析し、犯罪被害者へのより良い支援体制を検討すること。

方法：X都道府県警を調査対象組織とし、過去3年以内にDV事犯等（配偶者等からの暴力、ストーカー、高齢者・障害者・児童虐待、暴力的性的犯罪）を扱ったことのある警察官500名に、無記名自記式質問紙を配布・回収した。

結果：438名（男性383名、女性55名）から回答が得られた（回収率87.6%）。そのうち185名（53.2%）が、被害者が医療機関を受診したにもかかわらず、医療機関側からの通報が無かった事例を経験していた。医療従事者と警察との連携が「やや不十分」あるいは「不十分」と答えた者はおよそ半数あり、特に医師との連携が不十分であるとしていた。その内容としては、「DV事犯等の被害者保護に関する認識のずれ」「個人情報保護の視点に基づいた情報の取り扱い」が共に4割を越えていた。また、医療従事者に求められる対応として、医師では「捜査上の証拠保全」（69.9%）「警察への迅速な対応」（69.4%）「損

傷部位等の原因に関する事情聴取」（55.7%）、看護師ではこれらに加えて「精神的なケア」（25.8%）が多く挙げられた。被害者支援のために医療機関と警察の連携強化に必要なこととして、「定期的な意見交換、勉強会の実施」（53.2%）「医療従事者に対する教育」（43.6%）「連絡会議など組織体の設立」（33.3%）、その他「ワンストップセンター等の新たなシステム」「個人情報の提供のための取り決め」といった指摘もあった。

考察：医療機関から警察への通報を含めた連携体制が、迅速かつ適切な捜査と犯罪被害者への支援にとって重要と考えられるが、現状では必ずしも十分ではないことが分かった。そのため、警察と医療機関の間での組織的な連携や協働の体制を整え、定期的な意見交換や勉強会、医療従事者への研修の機会などを設ける必要がある。

### まとめ

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 19 件)

- 山田典子、吉池信男、田仲里江、鈴木朗子、櫻井蘭子：親密な関係にある者からの暴力的事犯被害者への支援方策に関する検討～警察官と医療機関の連携体制の課題について～．日本フォレンジック看護学会誌、査読有、1(2)、50-60、2015
- 山田典子：フォレンジック看護への期待～セーフティプロモーションの実践より～．日本フォレンジック看護学会誌、査読有、1(2)、108-111、2015
- 山田典子、田仲里江：ニューヨーク市における性暴力被害者支援の実際～Lenox Hill 救急専門病院のForensic Nurse 活動より～．日本フォレンジック看護学会誌、査読有、1(2)、85-94、2015
- 山田典子：離婚・ひとり親の女性が抱えるメンタルヘルスの現状と課題．産業精神保健、査読なし、23、28-32、2015
- 山田典子：配偶者・恋人などからの暴力的事犯に対する被害者への支援に関する調査報告．Best Nurse 4、査読有、30-34、2015
- 山田典子：配偶者・恋人などからの暴力的事犯に対する被害者への支援に関する調査報告その2、Best Nurse 5、査読有、46-49、2015
- 山田典子：配偶者・恋人などからの暴力的事犯に対する被害者への支援に関する調査報告その3、Best Nurse 6、査読有、46-49、2015
- Noriko Yamada：From the planning to the practice of the safe community design Part1. The 7th Asian conference on safe communities、査読有、1、236、2014
- 山田典子鈴木朗子：多職種連携チームの現

状と支援の課題 - 児童相談所に勤務する保健師の認識より - . 日本フォレンジック看護学会誌、査読有、1(1)、14、2014  
山田典子、友田尋子、吉池信男、中村恵子 : フォレンジック看護教育に対する受講生の反応 . 日本フォレンジック看護学会誌、査読有、1(1)、15、2014.  
山田典子 : 社会問題と健康課題を解決に導く「フォレンジック看護」とはなにか～なぜ、いま、フォレンジック看護なのか? 月刊ナーシング、査読なし、34(9)、6-8、2014  
友田尋子、山田典子、三木明子 : フォレンジック看護への期待と展望 . 看護教育、査読なし、56(1)、48-54、2015  
山田典子、山田真司、吉池信男、新井山洋子、長瀬比佐子 : 高齢者における日常生活動作の「おっくう感」の認識に基づく外傷の高危険者の判別 地域を基盤とした外傷に関する世帯調査のデータから . 日本セーフティプロモーション学会誌、査読有、6、29-37、2014  
山田典子、山田真司、川内規会、新井山洋子、長瀬比佐子 : セーフティプロモーションの担い手である市民ボランティアの変化 . 日本セーフティプロモーション学会誌、査読有、6、21-28、2014  
山田典子、友田尋子、中村恵子 : フォレンジック看護教育の活用の課題 . 日本ヒューマンケア科学学会誌、査読有、7(1)、54-55、2014  
YAMADA NORIKO : Nurse's support to the victims from the Domestic Violence with consideration of the sense of incongruity experienced during the supporting process . Journal of Japan Academy of Human Care Science、査読有、6(2)、89-102、2013  
山田典子、山田真司、川内規会 : セーフコミュニティにおける市民参加型外傷予防活動 ～グループインタビューから導かれた施策化の課題～ . 日本ヒューマンケア科学学会誌、査読有、6(2)、77-87、2013  
Yamada Noriko、Nobuo Yoshiike、Keiko Nakamura、Masashi Yamada : Screening of the difficulties of physical movement in the daily lives of the elderly, who are prone to have injuries questionnaire survey of the experiences of falling in the age group of 65 and over-.XX Conferencia Internacional de Comunidades Seguras、査読有、21、113、2013  
Noriko Yamada、Masashi Yamada、Nobuo Yoshiike、Yoko Niiyama、Junichi Kokubo : The transmission of information in the immediate aftermath of the Great East Japan Earthquake by the administration in their efforts to establish safe communities . Journal of Injury

Prevention、査読有、1、154、2012

[学会発表](計 15 件)

Noriko Yamada : Investigation of the supporting measures available to the victims of violent crime perpetrated by intimate persons. The International Conference on Forensic Nursing Science and Practice、査読有、28-31 Oct 2015 . Orland Florida .

Noriko Yamada、Hiroko Tomoda、Akiko Miki : Problems in Forensic Nursing Recognized by Academic Teaching Staff Members at Japanese Universities . The International Conference on Forensic Nursing Science and Practice、査読有、28-31 Oct 2015 . Orland Florida .

山田典子、吉池信男、中村恵子 : 日本における外傷サーベイランスの実態と課題 . 第3回日本公衆衛生看護学会学術集会、査読有、2015年1月10-11日、兵庫県神戸市 .

山田典子、鈴木朗子 : 多職種連携チームの現状と支援の課題 - 児童相談所に勤務する保健師の認識より - . 第1回日本フォレンジック看護学会学術集会、査読有、2014年8月30日、東京都 .

山田典子、友田尋子、吉池信男、中村恵子 : フォレンジック看護教育に対する受講生の反応 . 第1回日本フォレンジック看護学会学術集会、査読有、2014年8月30日、東京都 .

Watanabe Mari、Yamada Noriko、Kato Tokiko : Narratives of mothers who participated in Triple P-Positive Parenting Program: Focus on feelings of mothers with preschool children who need developmental support . XXth ISPCAN International Congress on Child Abuse and Neglect、査読有、14-17 Sep 2014. Nagoya, Aichi, Japan.

Suzuki Akiko、Yamada Noriko : The challenge and assignment of health nurse work in a child consultation office at support for father who abuses a child. XXth ISPCAN International Congress on Child Abuse and Neglect、査読有、14-17 Sep 2014. Nagoya, Aichi, Japan.

Noriko Yamada : From the planning to the practice of the safe community design Part1. The 7th Asian conference on safe communities in busan、査読有、12-14 May 2014. Busan Korea.

山田典子、友田尋子、吉池信男、中村恵子 : シミュレーション教育を用いたフォレンジック・ナース育成の課題 . 第2回日本公衆衛生看護学会学術集会、査読有、2014年1月11-12日、神奈川県小田原市 .

山田典子、友田尋子、中村恵子 : フォレンジック看護教育の活用の課題 . 第6回日本

ヒューマンケア科学学会学術集会、査読有、2013年12月21-22日、青森県青森市  
山田典子、山田真司、川内規会。セーフティプロモーションの担い手である市民ボランティアの変化。第1回公衆衛生看護学会学術集会、査読有、2013年1月14日、東京都荒川区。

Yamada Noriko, Nobuo Yoshiike, Keiko Nakamura, et al: Screening of the difficulties of physical movement in the daily lives of the elderly, who are prone to have injuries questionnaire survey of the experiences of falling in the age group of 65 and over-.XX Conferencia Internacional de Comunidades Seguras, 査読有、21-23 Oct, 2013, Merida, Mexico.

山田真司、山田典子。生活行動の難易度に関する高齢者の認識と外傷受診の関連について。日本行動計量学会第40回大会、査読有、2012年9月13日~9月16日、新潟県新潟市。

Noriko Yamada, Masashi Yamada, Nobuo Yoshiike, et al: The transmission of information in the immediate aftermath of the Great East Japan Earthquake by the administration in their efforts to establish safe communities. 11th World Conference on Injury Prevention and Safety Promotion, 査読有、1-4 Oct 2012, Michael Fowler Centre, Wellington, NZ

山田典子、山田真司。生活行動の難易度の問診に基づく外傷危険者のスクリーニングについて。第5回日本ヒューマンケア科学学会年次大会、査読有、2012年10月27日、青森県青森市。

〔図書〕(計 1 件)

KakuyaMatsushima, Hans Westlund, Kiyoshi Kobayashi, Ed, Social Capital and Development Trends in Rural Areas 査読有 Vol.9. Noriko Yamada, Nobuo Yoshiike: Changes in Citizen Volunteers' Participation in Safe Community Activities as An Important Part of Social Capital (Chapter12). 167-179. 2014. MARG(Kyoto) ISBN: 978-4-907830-09-0

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 典子 (YAMADA, Noriko)  
札幌市立大学・看護学科・准教授  
研究者番号：10320863

(2) 研究分担者

中村 恵子 (NAKAMURA, Keiko)  
札幌市立大学大学院・看護学研究科・教授  
研究者番号：70255412

吉池 信男 (YOSHIIKE, Nobuo)  
青森県立保健大学・健康科学部・教授  
研究者番号：80240232

(3) 連携研究者

なし